

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第44回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

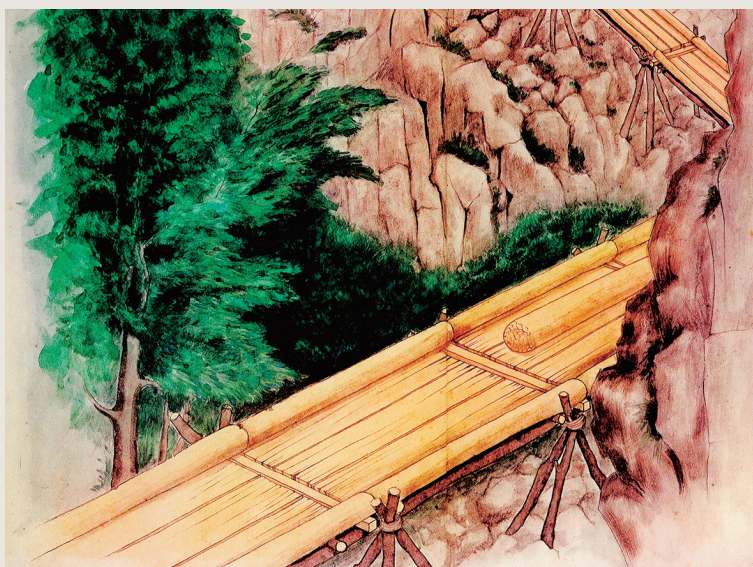
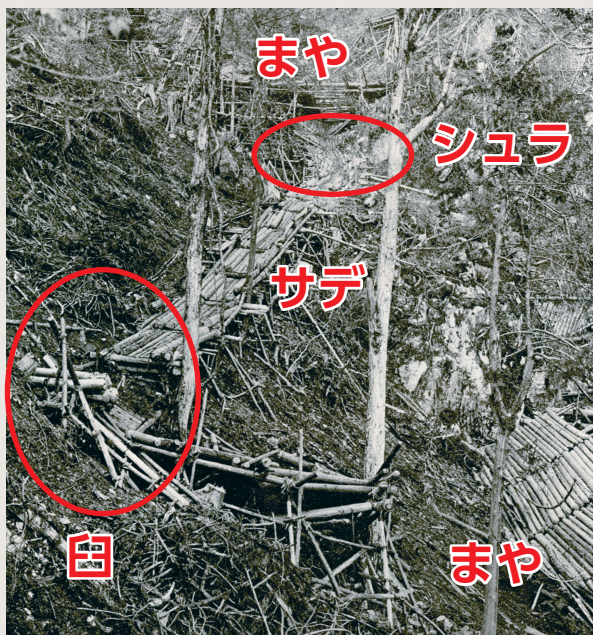
今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介いたします。

「裏木曾」その八

サデ・シユラ・臼

林業が機械化される以前、木曾や飛驒の山中から沢や川まで木材を運んでくる行程は総

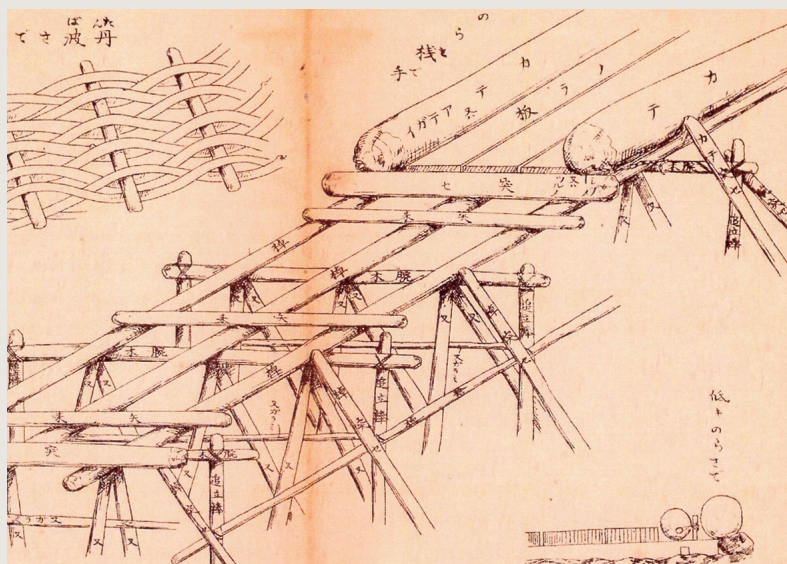
大正時代頃の飛驒での運材施設。出発点と終着点で木材が集積されているのが「まや」(第四十三回参照)、上部の丸太が形成している通路が「シユラ」、直線状の滑り台状の通路が「サデ」、方向転換部分が「臼」



大正時代初め頃の「サデ」(野良サデ)のイメージ
(「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)

称して「山落とし」とも呼ばれました。この行程で丸太を一本ずつ全て人力で引つ張るとなれば大変な労力となりますので、随所で山の斜面を利用して滑り降ろす工夫がなされました。この中で主要な役割を果たした運材施設にサデやシユラ、臼と呼ばれるものがあります。

サデは山の斜面で木材を滑り台のような仕組みで降ろす通路です。板を敷き、木材が脇へ落ちないために丸太を両側に縛り付けた「野良サデ」が特に使われ、この他に木の枝を積んだ道に土を被せた「もっこサデ」、ヒノキの枝や竹で滑走面を編んだ「丹波サデ」などがありました。これらは傾斜や材料が入手可能かによって使い分けられました。



「サデ」の構造図
(大正5年帝室林野管理局発行「木曾御料林之造材運材」より)

シユラ(スラとも)も同じ目的の木材を滑り降ろす運材施設ですが、丸太や角材を並べて中央に凹面の通路を構成するものであり、長

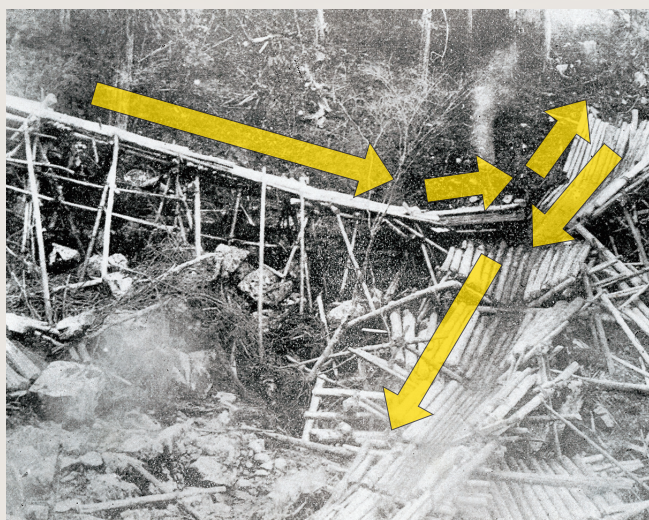
(上写真) 大正時代頃、現在の岐阜県高山市上宝町で撮影された「シユラ」



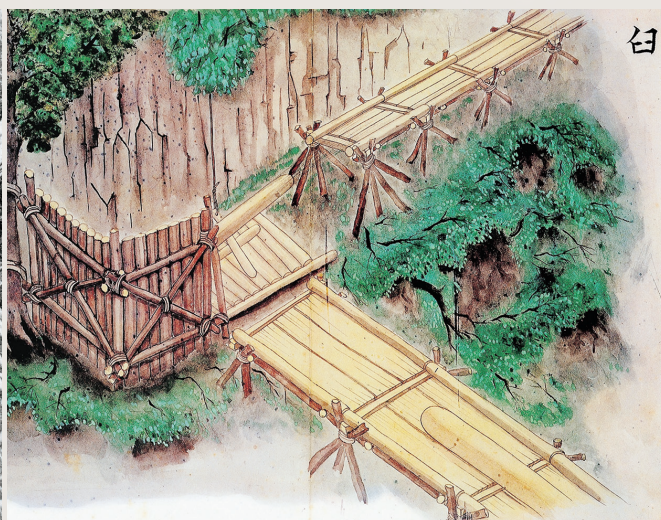
(下図) 大正時代初め頃の裏木曾での「シユラ」
(「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)

めの直線を形成することが多いサデよりも融通が利くので短距離部分、緩勾配部分、関節部分などに見られます。

現実の山の地形は複雑で険しいものであり、直線的な通路だけで木材を降ろし切ることは出来ません。緩やかな曲線路を形成して方向を調整しますが、やむを得ず急角度の方向転換が必要な箇所には「臼」呼ばれる施設が造られます。「臼」は滑り落ちてきた木材の衝撃を木の皮や木屑、枝、土などを積み上げた箇所を受け止め、減速して方向転換をさせるものです。しかしこれはかなり乱暴な方法であり、木材の損傷も心配されたため、なるべくなら造らないほうが良いとされていたようです。



大正時代初め頃に現在の岐阜県下呂市小坂町で撮影された「逆勾配転換路」
逆勾配を利用して降りてきた木材を減速させるのが狙い



大正時代初め頃の裏木曾での「臼」のイメージ
(「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)

「臼」のこの弱点を改良したものととして、大正時代初期に「逆勾配転換路」という施設も開発されています。

これらの施設は一見、あくまで人力で造られる原始的なものにも見えますが、必要な材料の吟味、組み立てなど、代々引き継がれてきた経験・熟練の技と相当の労働力がつき込まれているものでした。当時、これらの運材施設は設計図など無しで経験と勘で造られていたそうですが、実際に木を伐採する以前から建設に必要な木材や材料の入手方法も視野に入れる必要がありました。なお、運材施設に用いられた木材もそのまま山中に放置される訳ではなく、その地区での伐木運材が終了すれば上のほうから順に崩され、下に送られていきました。

裏木曾でのこれら「山落とし」の運材作業は時代による変化もあったのかもしれませんが、大正時代から昭和初期においては春から夏にかけての伐採作業が終わった後、秋から冬にかけて行われることが多かったようです。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。

これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかししの写真を紹介するサイトです。

当サイトへは、コードを眺み込んでください。

